

目次

- 東アジア人材採用のための会社説明会のお知らせ
- 自動車シンポジウムのお知らせ
- 講演会のお知らせ
- 中国経済研究会のお知らせ
- 読後雑感 アジア編 : 2013年 第20回
- 上海街角インタビュー ⑥
- 【中国経済最新統計】

東アジア人材採用のための会社説明会

日時:2013年12月4日(水) 11時~15時

会場:みずほホール(法経東館地下)

この度,京都大学東アジア経済研究センターでは,「東アジア人材」採用のための会社説明会を2013年12月4日、京都大学経済学部みずほホールにて開催することとなりました。「東アジア人材」とは,近年急速に経済成長を果たしている東アジア地域において活躍できる人材となる可能性のある学生(院生)を意味しております。こうした東アジア人材の採用を目的として,東アジア経済研究センター協力会の法人会員に会社説明を本学で行っていただきます。

1. 参加資格

①2014年3月に大学(または大学院)を卒業(修了)見込みの方

②東アジア地域出身の留学生、または東アジア地域に強い関心があり、現地語を理解する能力のある日本人等

2. 参加方法

①参加希望者は、下記の申込先に、事前に所属、氏名を連絡してください。ただし事前連絡のない場合でも参加は可能です。

②希望する会社(複数可能)の説明会が始まる5分前までに会場横の廊下に集合ください。

③履歴書は、参加を希望する会社数分を御用意ください。

3. 募集要項

<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~shanghai/131204%20setsumeikai/131204%20setsumeikai.html>

各社の募集要項は経済学部ホームページ内の「東アジア経済研究センター」に各社の募集要項を掲示しています。

4. 申込先

京都大学大学院経済学研究科附属東アジア経済研究センター TEL075-753-3469

E-mail shanghai@econ.kyoto-u.ac.jp

月日	会社名
2013年 12月4日(水) 11時～15時	三井住友海上火災保険株式会社
	プレミアファイナンシャルサービス株式会社
	大和ハウス工業株式会社
	株式会社エクセディ
	DMG 森精機株式会社
	株式会社ワイ・デー・ケー
	SMBC 日興証券株式会社
	京セラ株式会社
	三社電機株式会社

主催

京都大学東アジア経済研究センター

共催

東京大学ものづくり経営研究センター

後援

京都大学東アジア経済研究センター協力会

アジア自動車シンポジウム

黎明期のミャンマー自動車市場

—進出すべきか否か、その判断基準を考える—

■京都会場 2013年12月7日(土) 13時
京都大学百周年時計台記念館 2階国際交流ホール

■東京会場 2013年12月9日(月) 13時
京都大学東京オフィス(品川インターシティA棟 27階)

総合司会

13:00-13:30

挨拶 京都大学大学院経済学研究科長 植田和弘

13:30-14:30

京都大学大学院経済学研究科 教授 塩地 洋 日系企業から見たミャンマー自動車産業(仮題 以下同)

14:30-15:00

鹿児島県立短期大学 講師 山本 肇 自動車産業—政策・発展史・今後の展望

15:15-15:45

事業創造大学院大学 教授 富山 栄子 輸入規制を受けている新車市場

15:45-16:15

住友商事 自動車リテイルファイナンス事業部 木村 将裕 金融事情と販売金融現況

16:15-16:45
慶應大学経済学部 准教授 三嶋 恒平 オートバイ流通の実態

16:55-17:00
閉会挨拶

17:15-18:45

懇親会 参加費 2000 円(協会の会員は無料)

司会 京都大学経済学部特任教授/東アジア経済研究センター協力会理事 宇野輝

開会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター長/京都大学経済学部准教授 矢野剛

閉会挨拶 京都大学東アジア経済研究センター協力会長/京都大学経済学部名誉フェロー 大森経徳

参加の御申込は、塩地 shioji@econ.kyoto-u.ac.jp に会場名、氏名・所属、懇親会出欠を御連絡ください。
東京会場は定員100名、京都会場300名です。お早めにお申し込みください。

講演会のお知らせ

主催：京都大学東アジア経済研究センター
後援：京都大学東アジア経済研究センター協力会

『中国経済成長モデルとその転換への挑戦』 （”中国增长模式与转型挑战”）

講師 中国人民大学経済学院教授 陶 然

司会：矢野剛（京都大学経済学研究科准教授）

日時：2013年12月3日（火） PM 4:30-6:00

場所：京都大学法経五番教室

使用言語：中国語－日本語 逐次通訳（同時通訳ではありません）

「中国経済研究会」のお知らせ

2013年度第5回（通算第37回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりました。今回は中国復旦大学日本研究センターの戴曉芙先生より、日本でも大いに注目されている中国の土地財政やシャドーバンキングの問題についてお話をしていただきますので、大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

時 間： 2013年11月19日（火） 16:30－18:00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館・地下1階みずほホール

報告者： 戴曉芙（復旦大学日本研究センター副教授）

テーマ： 中国の「土地財政」と地方政府の投融資プラットフォーム問題について

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行います。2013年度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4月23日（火）、5月21日（火）、~~6月18日（火）~~、7月23日（火）

後期：10月22日（火）、11月19日（火）、12月17日（火）、1月21日（火）

（この件に関するお問い合わせは劉徳強（liu@econ.kyoto-u.ac.jp）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）

ヒンドゥー教特集

1. 「ヒンドゥー・ナショナリズム」 2. 「ヒンドゥー教」 3. 「ヒンドゥー教とイスラム教」
4. 「ヒンドゥー教巡礼」 5. 「踊るマハーバーラタ」

1. 「ヒンドゥー・ナショナリズム」 中島岳志著 中公新書 2002年7月15日

副題 : 「印パ緊張の背景」

この本の題名は「ヒンドゥー・ナショナリズム」であり、副題は「印パ緊張の背景」であるが、中味はヒンドゥー・ナショナリスト団体:「RSS」の解説本である。しかしインドをこのような視点から論じた書は他にはなく、たいへん参考になる。文章も体験談が織り込まれており読みやすく、その上、随所に哲学的思索の結果も書き込まれている。少し学術的表現になるが、思い切って題名を、「RSS の組織と行動分析」とでも付ければよかったのにと、私は思う。この本は、ヒンドゥー教とインドを理解しようとする人に、必読書として推薦できる。ちなみに「RSS」とは、「民族奉仕団」と訳され、1925年に創設されたヒンドゥー・ナショナリスト団体のことである。1948年、マハトマ・ガンディー暗殺に関与したとされ非合法化。のちに1975年、インディラ・ガンディー政権によって再度非合法化される。1980年代以降、インドで急速に勢力を拡大。以下に、中島氏の RSS の解説と分析を抜き書きしておく。

- RSS においては「カーストの廃絶」が強く訴えられている。彼らは、カーストは自己利益を優先するような自己本位の精神から生まれたもので、いかに自分たちのカースト集団に権益をもたらすかという利己心の発露であると批判し、カーストを撲滅することこそが現代インドの課題であるとする。
- RSS のカースト批判は、ネイションがカーストによって分断されることによって国民が一体化できるような統一性が低下することに対する恐れから生じたものであり、「均質な国民」を作り上げようとする意思がその背景にはある。さらにこの問題を考える際には、政府が制定している留保制度とカースト集団の利権をめぐる政治団体化の問題を考慮する必要がある。
- 留保制度というのは、州政府が「指定カースト」、「指定部族」、「その他後進階層」というカテゴリーを設定し、それに認定されたカースト民や部族民に対するさまざまな優遇措置を制度である。社会的に低い地位にある低カーストの者や部族民の社会的地位の向上を促進するために、そのカテゴリーに指定された者に対して、大学への入学や公務員の採用などの際に、一定の枠を与えるものである。そのため「指定カースト」や「指定部族」に認定されると、一般の人間よりもかなり大学に入学しやすく、公務員にもなりやすい。また奨学金や社会保障も受けやすく具体的な利益がかなり舞い込んでくる。当然、このような制度があると、下位のカースト集団はこの留保制度の恩恵にあずかろうとして、政府に「指定カースト」や「その他の後進階層」というカテゴリーに認定するように訴え始める。その活動が盛んになればなるほど、「自分は〇〇カーストの人間だ」というアイデンティティが強まっていき、逆にカーストを固定化・実体化することになってしまう。
- RSS の各種の活動は具体的利益を伴うことが多い。医療を無料で受けることができたり、各種の職業訓練を受けることができたりと、RSS の諸活動に参加すれば得をすることが結構ある。RSS は住民に対してさまざまな利益誘導を行いながら、底辺の支持を拡大しメンバーを増やしていつている。
- 地方から移住してきたことによって、伝統的共同体から切り離され、自己アイデンティティの崩壊に直面している人の多いこの地域では、RSS がその諸活動を通じて構築した人的ネットワークや、RSS の提示する「ヒンドゥー・ラーシュトラ」という疑似宗教的なヒンドゥー共同体のヴィジョンが、欠落感を埋めてくれる存在として魅力を持っていることも重要である。
- RSS の末端の組織の若者のほとんどは次のような者である。①経済的発展の波から取り残され、フラストレーションが溜まっている若者、②親の意向で参加している若者、③思想的にヒンドゥー・ナショナリズムに感化されたエリート。
- ミャンマーとの国境に近い地域に住む少数民族の人の中には、イギリスの植民地時代にキリスト教徒に改宗した人が多く、現在 RSS が重点的にヒンドゥーへの改宗活動を進めている地域である。また、ナガランドなどを含めたこの地域一帯は、インド独立以降、さまざまな形で分離独立運動が行われてきた場所であり、RSS にとっては、ネイションの統合のためにも何とかしてヒンドゥー文化への取り込みを進めたい地域なのである。
- RSS はヒンドゥーとイスラム及びキリスト教の間には、根源的な違いがあるという。それは自分たちヒンドゥーが、宗教の違いを「一つの真理の別の形での表れ」と考え、他の宗教も同じ真理を表現する根源的に同一のものを見なすのに対して、ムスリムやクリスチャンは、自らの信仰だけが正しい真理を表現していると考え、他宗教と相容れない別の真理の体系であるという違いであるという。
- ヒンドゥー・ナショナリストの女性が「あるべき女性像」として目指すのは、立派な子供を産み育てる「母」であり、経済

発展に貢献する「労働者」であり、男性を守る「闘士」である。そしてこのすべてを兼ね備えた女性が、「国家へ奉仕する女性国民」の理想的姿として語られるのである。

2. 「ヒンドゥー教」 森本達雄著 中公新書 2003年7月15日

副題：「インドの聖と俗」 帯の言葉：「悠久の時を超え 今も生き続ける民族のエートス」

この本は、インド研究の大家である森本氏のヒンドゥー教についての入門編である。初心者にも、わかりやすく書いてあり、ヒンドゥー教の概要をつかむには格好の書である。以下に、本書の特徴的な部分を抜き書きしておく。

- ・ヒンドゥー教には、まず第1に、キリストやマホメットに相当する特定の開祖は存在しない。それゆえ成立の年代もいつごろか漠として特定できない。その宗教の核となる「聖典」がない。したがってヒンドゥー教全般に通用する明確な教義・教理も存在しない。
- ・なぜヴェジタリアンは野菜のみ、人によっては葉菜しか口にしないのか。それは栄養学的見地からでも、ましてアメリカや日本で流行の美容ダイエットのためでもないことは言うまでもない。菜食主義は、もっぱら生きものを傷つけない、殺さないというヒンドゥーのアヒンサー（不障害・不殺生）の思想の実践にもとづくものである。厳格なヴェジタリアンが根菜をも禁忌するのは、根菜を採るとき、間違っただけで土中の虫類を殺しかねないという懸念からだと聞く。
- ・みずからを「アーリヤ人（高貴な人びと）」と称した侵入者たちは、先住民を征服していく過程で、彼らを「ダーサ（敵・悪魔）」と呼んで蔑視した。やがて両者の支配関係が明らかになると、「ダーサ」という語は、「奴隷」を意味するようになった。このように肌の色の違いがそのまま支配者と被支配者を区別する決め手となったとき、「ヴァルナ」すなわち「色・肌色」という語が身分や階級を表す語として用いられたことはうなずける。したがって歴史的には、アーリヤ人侵入期には、大きく上下二つの人種的ヴァルナが存在していたことになる。
- ・わが国では一般に、インド人といえばいかに褐色人種と思われがちであるが、実際には、北方カシュミール辺りの抜けるような色白人種から、南インドの色黒の人種まで肌色はさまざまである。そして色白は、インド人女性のあこがれの一つでもある。
- ・いっぽう、アーリヤ人がインドに進出してきたときにはすでに、彼らの部族社会の内部に職能的分化が進み、かなりの階級的区分があったこともたしかである。このことは、最初期の文献「リグ・ヴェーダ」のなかにも、クシャトラ（権力を持つ者・武人）、ヴィシュ（人民・庶民）などの語があることから明らかである。
- ・誇り高いアーリヤ人は、ヴァルナ（肌の色）の異なる異民族を征服し、その地に定着したとき、みずからの血の純潔を守るために、被征服民族を彼らに奉仕すべきダーサ（奴隷）として、彼らの職業的階級制度の下に組み込んだ。これがバラモン、クシャトリア、ヴァイシャの上位3カーストと、シュードラを峻別することになった後世の差別的なカースト制度の原型をなすヴァルナ制度である。
- ・**本来、ヴァルナ制度は、数において劣勢の征服民族が、多数派の先住民族を統治するための支配制度であった。**
- ・人は生まれによってどの集団に所属するかが先天的に決められることになった。この職業の世襲、婚姻、食卓を共にしうる社会集団は、「ジャーティ（生まれ、出生）」と呼ばれた。したがって不可触民のジャーティを除き、すべてのヒンドゥーは、いずれかのヴァルナとジャーティに所属することになる。
- ・インド全土でその数2千とも3千ともいわれるジャーティの種類や上下関係には、地方によってもかなり大きな格差があり、いちがいに同名ジャーティを同列に論じることはむずかしい。したがって、巷に氾濫するインド旅行記に紹介されている「カーストの実態」は、たまたま旅行者の目にとまったカースト社会の断面図にすぎないことが多い。
- ・そもそも「カースト」という語の起源は、16世紀初頭にインドに進出してきたポルトガル人が、現地の複雑な階級的職業集団に遭遇し、これをポルトガル語の「血統・家柄」を意味する「カスター」という語で呼んだのが始まりである。今日、われわれが、インド社会を「カースト社会」としてとらえるとき、言うところのカーストは、ジャーティを指す場合がほとんどである。
- ・ガンディーは、カーストの序列、とりわけバラモンの絶対優位を権威づける論拠とされてきた「リグ・ヴェーダ」に真っ向から意義申し立てを行った。「わたしの知るかぎりでは、社会主義のもとでは、社会の構成員はすべて平等である。すなわち一人として身分の賤しい者はなく、一人として身分の高い者はいない。人の体のなかで、頭は体のいちばん上にあるからといって貴くはなく、足の裏は地に触れるからといって賤しくはない。肢体みな平等であるように、社会の構成メンバーも平等である。これが社会主義である」。

3. 「ヒンドゥー教とイスラム教」 荒松雄著 岩波新書 1997年5月20日

副題：「南アジア史における宗教と社会」

この本は、約40年前に書かれたものだが、インド・パキスタン・バングラデシュにおけるヒンドゥー教徒とイスラム教徒の確執を理解する上で、その指摘は色あせておらず、参考になることが多い。以下に、その要点を抜き書きしておく。

- ・ヒンドゥーにしるムスリムにしる、南アジアでは、その信徒の大多数は、字も読めない、農民を主とする一般の民衆である。難解な協議の内容は、そのままでは理解できるはずがない。学界の主要な研究成果そのものからは、信徒の圧倒的多数を占める一般民衆が信仰してきた宗教内容や、その人たちによって守られてきた儀礼や慣習などは、

ほとんどわからないといっているのである。

- 支配権力ないしは国家が、その支配を貫徹するために、宗教あるいは教団や信徒社会に対していかに対処したかという面と、逆に、宗教そのものが、政治権力や国家の成立・存続にどのような役割を果たしたかという面に、留意せねばならない。
- ヒンドゥー教では、いわゆる偶像崇拜が日常の宗教儀礼や慣習のなかで当たり前のこととなっているのに対して、イスラム教では、礼拝の対象に偶像を置くことは、この宗教の成立の当初から今日に至るまで、厳しく拒否されてきた。
- 知的思惟に慣れていない一般の民衆にとって、礼拝の対象たる偶像や物体の顕現として目の前に確認し、それを媒介として神に祈念することが、宗教的意識や信仰への情熱を高めるのに役立つことはいまでもない。この点を考えると、偶像を拒否するイスラム教は、知的な行為としての祈りを要請する宗教として注目されてよい。
- ヒンドゥー教の教義とそれに基づく人生観・世界観のエッセンスは、簡単にいえば、業(カルマン)と輪廻(サンサーラ)という考え方にあらわれているといえるだろう。現在、この自分が生きている生、つまり今生あるいは現世は、いくつもの生や世のうちの一つに過ぎない。人にはみな、前生・前世があり、来生・来世が待ち受けているのである。これらの生・世は、輪のようにつながっている。そして今生・現世のあり方を規定するのは、前生・前世の業である。業とは、簡単にいえば、人間の行為にほかならない。だから、前世の業が、この世に生きている自分の生のあり方を決めているのであり、この世でなす行為こそが、自分の来世の生き様を決めるというのである。
- この永劫の輪廻の生の輪から抜け出して天上の楽土に安住することが、ヒンドゥー教徒の理想である。
- イスラム教も究極的には天上の楽園を想定し、神の国を理想に掲げる。人間は死んだあとは、《最後の審判》の日まで、いわば仮の眠りについているに過ぎない。肉体は朽ち果てても、魂は生き続けて、神による審判の日を待たなければならぬのである。
- 最後の審判における唯一神アッラーの裁きは、秋霜烈日、きわめて厳しい。
- ヒンドゥー教とイスラム教の教義の基底にある人生観・世界観を比べ合わせてみると、まったく違っているようではなさながらも似ているところがある。両宗教ともに、内容は異なるにもせよ、《天国》と《地獄》とを想定し、究極の生を、天上の楽園、神とともにある理想郷に求めている。ただ、そこに到達するまでの道は違っており、しかも、そこに行き着こうとする人間の行為とそれを規制する絶対者、神のあり方については大きな差異がある。そこから絶対者に対する人間の帰依の仕方、信徒たちの死生観や倫理意識の内容にも、現実の世界では、かなりの違いが出てくる。
- ヒンドゥー教の場合には、教義の面でも、現実の場における集団関係においても、他の宗教にしばしば見られたような《正統と異端》をめぐる激しい対立・抗争の関係はほとんど認められない。
- ヒンドゥーの子に生まれることこそ、実はヒンドゥー教徒たる条件なのだと言明すれば、一番わかりやすいであろう。だから、はじめヒンドゥー教徒の社会の外にいたものにとっては、自分はまさしくヒンドゥー教徒になったと自らは信じていても、ヒンドゥー社会のなかでヒンドゥーとしての資格を得ることは、そう簡単にはできないのである。
- カースト=ヴァルナ制のなかで、バラモンに次ぐものとして、クシャトリアすなわち政治権力の担い手たる王や戦士が第2の身分にランクされたのも、このことを示している。しかも、王はバラモンによって神から権力を授けられたのだという解釈もあらわれた。それは西欧にもあった王権神授の考え方と似ている。つまり人間の世界を統治する資格を、神が認めたということになるのである。バラモンとクシャトリアという二つの上層ヴァルナは、こうして相互に結び付きを強めていった。言葉をかえていえば、宗教権威と世俗権力との統合あるいは妥協が、ヴァルナ=カースト制度によって裏打ちされたという格好なのである。
- 支配・統治の実際面を見てみると、徴税機構などによくあらわれているように、在来のインドの諸制度が大幅に利用されていたし、また上層から末端の役人に至るまで、多くのヒンドゥー教徒が、信仰を買えることなしに登用されている。征服されたあとに本来は異教徒の王として打倒・抹殺されて然るべきはずの旧ヒンドゥー支配層が、ムスリム支配の当初からすでに、改宗も強制されずにその地位を保っていた例さえ各地で見受けられた。つまり、侵入し、権力を確立してインドの王となったムスリム支配者たちは、むしろ旧来のヒンドゥー支配層をそのまま利用することによって、異民族でしかも少数派であった自分たち集団が獲得した権力の存続とその経済的基盤たる地稅収入の確保という現実的な利害関係をまず重視した。
- 12世紀末の西北インドにおけるトルコ系ムスリムの侵入・征服と、そのあとに続くムスリム諸王朝の支配の場合にも、それに先だって行われたガズニ朝やゴール朝勢力のインドへの侵入も、聖戦を謳ってはいたが、その主な目的の一つは、インドの支配層やヒンドゥー・ジャイナ寺院が抱えていた莫大な富や貴金属の奪取、あるいは奴隷としての青年子女の略奪にあった。
- ヒンドゥー王権の下で安居していたバラモンたちは、その宗教的情熱に訴えることによって異教徒への抵抗を組織するだけの実力も意志もなかった。
- ムスリム王権の支配は、17世紀後半のムガル帝国の1時期を除くと、インド亜大陸の広範な諸地域をすべてその領域に包含した帝国の支配というよりは、むしろ、いわば飛び石のように各地に散在する中小の王国の支配といった形をとった。だからムスリム王国がヒンドゥーを首長とする王国に連なり、そのヒンドゥー王国の向こう側にまた別のム

スリム王国の領土があるといった、入り乱れた状態が普通だった。

- イギリスの支配は、ムスリムとヒンドゥーのあいだに楔を打ち込むことによって両者の分裂を策し、その間にあって自らの支配を貫徹しようとする巧妙なやり方をフルに利用した。
- イギリスの支配が拡大していくにつれて、インドのムスリム旧支配層は、一転して被支配者の地位に落とされた。しかも、その多くは、それまで支配の対象であったヒンドゥーに対して少数者の立場に置かれるに至ったことを痛切に意識させられたのである。
- イギリス支配という、いわば第3者の出現によって、インドの社会と政治の状況のなかで二つの有力なコミュニティを形成していたムスリムとヒンドゥーが、それぞれの社会の原理であった宗教そのものの違いを少なくとも前面に出すことなしに、会合し、討論し、同じ決議をすることになったのである。

4. 「ヒンドゥー教巡礼」 立川武蔵著 集英社新書 2005年2月22日

帯の言葉：「インド、ネパール、バリ島、“聖なるもの”を求め、旅は始まる！！」

この本の大半は、立川氏がヒンドゥー教の真髄を求めて、インド各地・ネパールのカトマンズ・インドネシアのバリ島などを巡礼した紀行文で占められているが、第1章だけにはヒンドゥー教の概要が示されている。それが比較的わかりやすく、まとまっているので、まずそれを列記する。その後、立川氏が紹介しているインドの諸相を書いておく。

- 「ヒンドゥー教」とは何か。インドの古典語サンスクリットで「シンドゥ」とは河を意味し、インダス河を指すことになったという。この「シンドゥ」がペルシャ語に入って「ヒンドゥ」となり、インド人を意味するようになった。このペルシャ語から英語の「ヒンドゥ」ができ、インドの宗教あるいはインド主義という意味で「ヒンドゥイズム」つまり「ヒンドゥー教」という語が用いられるようになったといわれる。
- ヒンドゥー教には、日本の神道と同様、特定の創始者あるいは教祖はいない。
- ヒンドゥー教は多神教であり、実に多くの神々がいる。その神々のうち、シヴァ、ブラフマー、およびヴィシュヌが主要な3神だ。
- ようするにヒンドゥー教では、われわれのまわりにあるすべてのものが神なのである。すべてのものに神の力が宿るといっても、かたちあるものそのままだが神なのだという。
- インドの宗教史の時代区分をごく簡単にまとめると次の様になる。
 - 第1期＝インダス文明の時代－紀元前2500～紀元前1500年
 - 第2期＝バラモン教(バラモン中心主義)の時代－紀元前1500～紀元前500年
 - 第3期＝仏教などの非正統派の時代－紀元前500～紀元600年
 - 第4期＝ヒンドゥー教興隆の時代－紀元600～紀元1200年
 - 第5期＝イスラム教支配下のヒンドゥー教の時代－紀元1200～紀元1850年
 - 第6期＝ヒンドゥー教復活の時代－紀元1850年以降
- 12、3世紀にインド仏教が亡んだ大きな原因の一つは、イスラム教徒による仏教僧院の破壊であった。僧院中心の形態、つまり攻撃しやすい形態をとっていた仏教を亡ぼすことに成功したイスラム教だが、家庭生活と密着するヒンドゥー教を同じように破壊することはできず、共存してきた。
- ヒンドゥー教はカースト(ヴァルナ)制度のある社会にしか存続できない。さらに英国はインドを統治する目的で、それまですでに社会の枠組みとして機能していたヴァルナ制度を法制化した。今日のインドではヴァルナ制度は法的には存在しない。また政府もこの制度が存在したことの名残によって生ずる社会的差別をなくすようにさまざまな工夫をしている。
- インド人には自分の生まれた地方とインド全体への2重の帰属意識がある。
- 生まれた瞬間から、生類は死へと向かう。どのような生命体にも、自らに許された命を永らえようとする力と、自らの命が終わりへと向かっていることを知る力とがある。この二つの異なる方向を有する力が織りなす動きをインド人はシヴァと名づけた。「シヴァ」とは、また静寂、吉祥を意味する。つまり彼らは、シヴァという生と死の織物を、静寂なもの、めでたきものととらえたのである。
- ヒンドゥー教徒はいまだかつて諸外国の領土を占領するために、宗教の名のもとに軍隊を派遣したことはない。ヒンドゥー教徒の内部には今日もまだ解決のできていない社会的差別を抱えてはいるが、ヒンドゥー教は他の宗教に対してまことに寛容である。この寛容は、すべてのものを聖化しようとする、つまり聖なる意味を与えようとする伝統からくるとわたしは思う。

5. 「踊るマハーバーラタ」 山際素男著 光文社新書 2006年1月20日

副題：「愚かで愛しい物語」

著者の山際氏は、「マハーバーラタ」、マハーは偉大の意、バーラタは古いインドの呼称。インド人は昔からこれを「インド大戦争」と呼んでいる、「マハーバーラタ」はサンスクリット原典で全18巻、10万詩節、1200章、20万行を超える世界最大の叙事詩である」と書いている。そのさわりをよんでみたいと思う人には、格好の読み物だろう。

山際氏は、「マハーバーラタの冒頭は、ある王の蛇供養から始まる。天地創造はその後である。ナーガ(キングコブラ)をやっつける逸話から世界最大の叙事詩が展開されるのである。インドに侵入してきたアーリア人がいかにこのナーガを恐れていたか、ということでもあろう。なにしろナーガが怖くて仕方がなかったのである。一咬みで虎や象もぼったりなのだから…。そしてアーリア族に抵抗したのが先住民ナーガ族である。インド北東部の辺境地帯には古代からナーガ族が住み、ナーガランド州を形成している。古からヒンドゥーの侵入者たちに徹底的に抵抗し、今も戦いを挑んでいる」と書いている。たしかに東南アジアのヒンドゥー教寺院や仏教寺院の門前には、狛犬ではなく、どこでもナーガが鎌首をもたげて鎮座している。また橋の欄干や階段の手摺りなどが、長いナーガであることが多い。そのナーガとインド東北部のナーガランド州との因果関係について、私はこの本で始めて知った。

山際氏は、インドのカーストについて、「インドは近年まで製造技術が発展せず、独立後も長い間、自動車もエンジンだけはイギリスのロールスロイス社から輸入していた。バラモン階層は特に手を汚すことを厭い、肉体労働を蔑視してきた。だから油にまみれる労働、製造分野には手を出さなかったのだ。日本の工業技術が急速に欧米に追い付き追い抜いていったのは、識字率も含め日本人の知的水準が庶民レベルで高く広く普遍化していたからである。インドが農業、工業分野でずっと遅れをとってきたのは“貧しい”からではなく、貧しい階層を数千年と作り続け、抑圧してきたからに他ならない。近頃IT分野でどうのこうのといわれ始めたのも、IT産業は“手を汚さず”に済むから、上位カーストの高学歴層が“安心”して進出してきたからではないのか」と書いている。私はこの山際氏の主張について、賛同するものでないが、カースト制度などの身分制度についてはまだその功罪を検討しているところなので、この場では意見を控えておく。

以上

上海街角インタビュー ⑥

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長（海外委員）
順利包装集団董事（在上海）
福喜多技術士事務所所長
福喜多俊夫

「厚黒学」

私が初めて「厚黒学（ホウヘイシュエ）」を知ったのは、2002年に中国へ赴任した時で、顧問をしていた会社の中国人スタッフから学んだ。「厚黒学」は清朝末期の四川省の思想家、李宗吾という人が過去の中国の皇帝や征服者の行動を分析して編み出した一種の処世術というか「成功の哲学」で、成功するには「面の皮はあくまで厚く、腹はあくまで黒くしなければならない」と説いたものである。中国でビジネスをする人はこの「厚黒学」を知っておくと大いに役に立つと思う。

厚黒学とは？

現代の中国人がこの「厚黒学」を信じているかどうか判らないが、時々交渉の席で「この人は厚黒学を勉強したのではないか」と思われる人に出会うことがある。厚黒学は現在でも復刻版（現代中国文）が書店に並んでおり、厚黒学のビジネスへの応用とか派生本が数多く出版されている。日本でも葉室早生訳「厚黒学」が1978年に五月書房から、尾鷲卓彦訳「厚黒学—厚くましく腹黒く生きよ」が1998年に徳間書店から出版されているが、いずれも絶版になっている。しかしアマゾンで中古本が手に入ることがある。私は復刻本を深圳空港の書店で、尾鷲卓彦氏の訳本をアマゾンで入手した。2009年には黄文雄著「厚黒学—腹黒くずぶとく生きよ」が心交社から出版されている。

李宗吾の「厚黒学」は荀子の「性悪説」を論拠にしており、尾鷲卓彦訳によれば、「いにしへの英雄豪傑にはかならずひそかに伝授されてきた成功の秘訣があるはずだ」と追い求めること数年、偶然にも三国時代の数人の人物に思い当たった時、「そうか、わかったぞ。昔の英雄豪傑は、ただ面の皮が厚く、心が腹黒いだけなのだ！」と悟り、「厚黒学」を編み出した、と記されている。

今どきの中国の若者は「厚黒学」を知っているのか？ 興味を覚えたので何人かにインタビューを試みた。まず、弊社のスタッフ4名に聞いたが、35歳の営業経理（男）は知っていたが、他の3名（男28歳、女28歳、女26歳）は知らなかった。取引先の中国人総経理6名に聞いたところ全員が知っていた。念のために「兵法三十六計」を知っているか聞いたところ、これは全員が知っていた。どうやら中国のビジネスマンには「厚黒学」より「兵法三十六計」のほうがポピュラーなようだ。しかし、政治家には「厚黒学」がより役に立つと思う。

一方、若い人は知っているか、南京西路の新華書店で経済書売場にいた大学生風の男性に聞いたところ彼は知らなかったが、彼の連れは知っていた。私の友人の娘さん（理工系大学4年）にも質問したが知らなかった。

厚黒学は難しい

「厚黒学」は表面的に読めば、多くの歴史上の人物の行動例を示して、「厚黒であれば成功し、不厚不黒の者は失敗する」と唱えているわけだが、当時の中国人にも賛否両論があり、「世直しの思想である」と称える人と、「危害を与える学問」として批判する両派があったようだ。

たしかに訳本を読んでも（中国語の復刻本は更に難解）、表面的に読めば実に単純だが、「厚黒学」は自修能力が大事だとか、李宗吾自身が、「わたしは、ひとつのルールを定めている、厚黒を用いて一個の私利をはかるのは、最も卑劣な行為であり、厚黒を用いて衆人の公利をはかるのは、至高無上の道徳である」というのを読むともうすこし深読みができる。

中国でビジネスをするために「厚黒学」は知っておいたほうがいい

「厚黒学」は清末の1912年に発明され、1936年まで書き連ねられたものなので、その時代背景を知っておく必要はあるが、現在でも復刻本が続々出版されており、友人の陸さん（日系企業に勤める中国人）の話では、中国のビジネスマンの中では理解の程度は別にして、ポピュラーなものだという。ただ、陸さんは、「李宗吾は“厚黒”は国を治めるためには害をなすものだと言っており、彼の皮肉を読み取らねばならない。政治家は“厚黒”をよく使うが、ビジネスマンには“兵法三十六計”の方がよい」と語っていた。私は中国

生活 10 数年の間に何度か「この人は厚黒学を勉強している」と思われる人に遭遇した。

先に「厚黒学」を紹介したが、中国のビジネスマンが意識の底に宿していると思われるものに「兵法三十六計」がある。

「孫子の兵法」とか「三十六計逃げるにしかず」など皆さんよくご存知だと思う。中国の兵法は「孫子兵法」や孫子の子孫である孫臏の「孫臏兵法」などいくつも作られたそうだが、現代中国人が身につけているのは「兵法三十六計」といわれるもので、ウィキペディアによれば、成立時期は不明であるが、大体 5 世紀までの故事を 17 世紀明末清初の時代にまとめられたものだと言われている。中国のビジネスマンはこの「兵法三十六計」をよく知っており、時々ビジネスの席で、“なるほどこれを使っているのか”と思わせられることがある。

「兵法三十六計」とは

「孫子兵法」は十三編からなっているが、「兵法三十六計」は大きく分けて 6 分野、それぞれに六計、合計三十六計から成り立っている。中国の書店には各種の解説本があり、私が参考にしたのは遠方出版社の「孫子兵法と三十六計」だ。原文とその解説、応用例が記されている。日本語版でも、守屋洋著「兵法三十六計 一世界が学んだ最高の処世術」三笠書房・知的生き方文庫（2004 年）、梁増美著「中国人のビジネス・ルール 兵法三十六計」ディスカバートゥエンティワン（2008 年）、カイハン・フリッペンドルフ著/辻谷和美訳「兵法三十六計の戦略思考」ダイヤモンド社（2008 年）、古田茂美著「兵法がわかれば中国人がわかる」ディスカバートゥエンティワン（2011 年）が出版されている。

中国の兵法は戦わずして勝つことを最良の策としており、「三十六計」もあの手この手の「だましの戦略」といえないこともない。

勝戦計：こちらが戦いの主導権を握っているときの定石

- 第一計 瞞天渡海（天をあざむいて、海を渡る）
普段見慣れているものは気づかれにくい、油断させて攻撃する
- 第二計 困魏救趙（魏を困んで、趙を救う）
魏の大軍が包囲している趙に正面から救援に行かず、手薄になっている魏を攻める
- 第三計 借刀殺人（刀を借りて、人を殺す）
自分の戦力を消耗させることなく、同盟者や第三者が敵を攻撃するように仕向ける
- 第四計 以逸待労（逸を以って、労を待つ）
味方の力を温存し、敵の疲れを待つ
- 第五計 趁火打劫（火につけこんで、おしこみを働く）
火事場泥棒。相手の弱みにつけこんでどんどん攻める。
- 第六計 声東撃西（東に叫んで西を撃つ）
東を攻めると見せかけて、西を攻める。 陽動作戦

敵戦計：余裕をもって戦える、あるいは同じ力の敵に対する戦略

- 第七計 無中生有（無中に有を生ず）
無いものがあるように見せる、あるものを無いと見せる。虚虚実実のかけひき
- 第八計 暗渡陳倉（ひそかに、ちんそうに渡る）
相手の虚をつき、油断している場所を攻める。 迂回作戦
- 第九計 隔岸觀火（岸を隔てて、火を観る）
相手に内紛の兆しがあるときは、じっと相手の自滅を待つ
- 第十計 笑裏藏刀（笑裏に刀をかくす）
笑顔で近づき油断を誘う。 ほめ殺しもこの計の一手
- 第十一計 李代桃僵（すもも、桃に代わって倒れる）
皮を斬らせて肉を切り、肉を斬らせて骨を断つ
- 第十二計 順手牽羊（手にしたがいて、羊をひく）
少しの利益でも取れる時にとる。

攻戦計：相手が一筋縄ではいかない場合、上手く勝つための戦略

- 第十三計 打草驚蛇（草を打って、蛇を驚かす）

-
- 第十四計 草を叩いて蛇がいるか調べる。 偵察を出して反応を探る大切さ
借屍還魂（屍を借りて、魂を還す）
役に立つか立たないかは利用方法しだい、利用できるものは何でも利用する
- 第十五計 調虎離山（虎をあしらって、山を離れしむ）
敵に利のある地で戦えば、自ら負けに行くようなもの、味方に有利な地で戦う
- 第十六計 欲擒姑縱（とらえんと欲すれば、しばらくはなれて）
敵をわざと逃がして、気を緩ませた所を捕らえる。 交渉事でも相手の逃げ道を作る
- 第十七計 抛磚引玉（れんがを投げて、玉をひく）
海老で鯛を釣る戦法。 うまい話で相手を誘い出す
- 第十八計 擒賊擒王（賊を捕らえんには、王を捕らえよ）
日本では「将を射んとすれば、馬を射よ」という諺になっている

混戦計：相手はかなり手ごわく、乱戦時の戦略

- 第十九計 釜底薪抽（釜の底より、薪を抜く）
敵を直接攻撃するより、補給路を断つ。
- 第二十計 混水摸魚（水を混ぜて、魚をさぐる）
相手の内部混乱に乗じて勝利を収める戦略
- 第二十一計 金蟬脱殻（金蟬、殻を脱ぐ）
変化がないようなふりをして、移動したり、退却したりする
- 第二十二計 関門捉賊（門を閉ざして、賊を捕らえる）
敵の退路を断ち、包囲殲滅する。 第16計の反対
- 第二十三計 遠交近攻（遠く交わり、近くを攻める）
遠くの相手と同盟を組み、近くの敵を叩く。 外交戦術の基本
- 第二十四計 仮道伐虢（道を借りて、虢（かく）を討つ）
小国は救援という大義名分のもと併合してしまう

併戦計：味方同士の中で、優位に立つための戦略

- 第二十五計 偷梁換柱（梁をぬすみ、柱に換える）
相手の中に味方を送り込み、相手を骨抜きにする戦略
- 第二十六計 指桑罵槐（桑を指差して、えんじゅを罵る）
本来の相手で無い別の相手を批判し、間接的に本来の目的を達する
- 第二十七計 佯痴不癡（痴をいつわるも、てんせず）
愚かな振りをして、相手を油断させる。 織田信長もこの手を使った
- 第二十八計 上屋抽梯（屋にあげて、はしごをはずす）
二階に上げてはしごを外す。 相手をおびき出して戦力を分断する
- 第二十九計 樹上開花（樹上に花をさかす）
こちらを大きく見せて相手を威圧し、時間を稼ぐ。 ハツタリ戦法
- 第三十計 反客為主（客を反して、主となす）
客のうちはじっと耐え、機会がおとずれたらすばやく動いて主導権をとる

敗戦計：圧倒的に劣勢の場合の戦略

- 第三十一計 美人計（美人の計）
美人を使ってでも相手のやる気をなくさせる
- 第三十二計 空城計（空城の計）
わざと隙を見せて、敵の動揺を誘う。 窮余の策
- 第三十三計 反間計（反間（スパイ）の計）
スパイを利用し偽情報を流して相手を混乱させる
- 第三十四計 苦肉計（苦肉の計）
多少の犠牲は覚悟の上で行動する
- 第三十五計 連環計（連環の計）
敵の勢力が強大な時は正面から攻撃するのは愚策、策を練り相手の動きを弱める
- 第三十六計 走为上（にぐるを上となす）
勝算が無ければ戦わずして逃げ、次回に備える

兵法は言うならば、中国的合理性だ。前掲書で古田茂美さんも、「一見理不尽に見える中国企業の行動の背景には、実はそれなりのロジックがある」と述べている。兵法は中国人にとってひとつの文化だと理解して対応することが必要なのではないだろうか。

【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 F)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2											
6月	9.5	15.1	17.7	6.4	11.8	223	17.9	19.0	6.6	2.8	15.9	15.2
7月		14.0	17.2	6.5	27.7	315	20.3	23.0	2.7	19.8	14.7	15.0
8月		13.5	17.0	6.2	33.4	178	24.4	30.4	6.4	11.1	13.6	14.8
9月	9.1	13.8	17.7	6.1	27.3	145	17.0	21.1	-3.5	7.9	13.1	14.3
10月		13.2	17.2	5.5	34.1	170	15.8	29.1	-0.6	8.7	16.7	14.1
11月		12.4	17.3	4.2	21.4	145	13.8	22.6	-12.9	-9.8	16.2	14.0
12月	8.9	12.8	18.1	4.1	5.7	165	13.3	12.1	-15.4	-12.7	17.3	14.3
2012年												
1月				4.5	25.3	273	-0.5	-15.0	4.6	10.8	16.6	14.8
2月		21.3		3.2	—	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013年												
1月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5			14.3	14.1

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
 2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、()内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
 3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。
 出所：①—⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。